

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 15 日現在

機関番号：32613

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010 年 ～ 2012 年

課題番号：22652025

研究課題名（和文） 科学言説と探偵小説のトランスナショナルな移動と交差をめぐる文化研究

研究課題名（英文） Cultural Studies on transnational movements and intersections of scientific discourses and detective stories

研究代表者

吉田 司雄 (YOSHIDA MORIO)

工学院大学 基礎・教養教育部門 教授

研究者番号：50296779

研究成果の概要（和文）：近代日本における西洋近代科学受容についてはすでに多くの研究があるが、そのほとんどは専門家の言説に焦点化したものであった。しかし、近代科学が大衆化する過程に関わったのは専門家だけではなかったし、そうした大衆レベルでの科学受容が近代日本社会の重要な部分を構成している。本研究では特に、科学言説と日本探偵小説との交差を問題とし、さらに戦前日本の植民地であった台湾や韓国においてどのように浸透していったかを検討した。

研究成果の概要（英文）：Although there have been many studies on Japanese acceptance of western sciences, they mainly focused on professional discourses. However the process of popularization of sciences is not limited to professional research and education. Public acceptance of scientific knowledge is an important part of modernization of the Japanese society. I studied several aspects of Japanese acceptance of scientific knowledge in the public, especially the relationship between scientific ideas and their representations in Japanese detective stories. Moreover I consider how they were connected with the situations in Taiwan and South Korea which were colonies of Japan during the prewar years.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 22 年度	800,000	0	800,000
平成 23 年度	700,000	210,000	910,000
平成 24 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	450,000	2,750,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：文学一般・日本文学・比較文学・科学史・大衆文化

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、科学史・科学技術社会論の専門家であり本務校の同僚でもある連携研究者の林真理と、「近代日本における科学言説の浸透と変容をめぐる文化研究」という研究課題名で科学研究費補助金基盤

研究（C）〔2004-2007 年度、課題番号 16520111〕および工学院大学総合研究所一般研究費（総合的・学際的研究）〔2004 年度〕、工学院大学総合研究所プロジェクト研究費〔2006-2009 年度〕を受け（いずれも研究代表者）、基礎的資料の収集分析・データベー

科学化と公開研究会の開催等を行ってきた。科学的知識が広く社会に浸透していく状況を精査すると共に、時を同じくして多くの文学作品に描かれた科学者像や科学的知識のありようを検討し、今日にも通じる大衆化社会における科学と文学との交差の様態を解明することを目指してきた。本研究では、これまでの成果を発展させつつ、より具体的な問題に関して集中的な掘り下げを国内外の研究者と行おうと考えていた。

また、研究代表者は近代日本における探偵小説ジャンルの形成と変容に強い関心を持ち、編著『探偵小説と日本近代』（青弓社、2004年）の刊行、『コレクションモダン都市文学40 探偵と小説』（ゆまに書房、2008年）のための詳細な関連年表作成、『ぶろふいる』復刻版解説のための探偵小説マニア共同体形成期調査など、様々な角度から研究を積み重ねてきた。2009年3月には台湾の国立中興大学台湾文学研究所に招聘され、近代日本の探偵小説史について連続講演（3月16～18日）をする機会を得るとともに、トランスナショナルな文化接触がいかに文学テキストに影響を与え得るかを考察する台湾の研究者との共同研究プロジェクトを進める準備を整えることができた。さらに、「忍者文化」をテーマとする研究会を新たに結成して、中国・台湾の武侠小説や西洋のスパイ小説との比較考察を行うなど、本研究のテーマを深化し広げるための準備に取り掛かっていた。

2. 研究の目的

本研究は、科学言説と文学言説を中心とする他の言説群との相互関連性を問題とし、文学研究の内側に止まるのではなく、科学史・科学思想の領域の研究者と共同して情報データベースを作成しつつ、国際的・脱領域的なレベルでの積極的な議論を行える場所をつくり、文学研究・文化研究の新たな地平をひらこうとするものである。とりわけ、西洋近代科学と密接な関わりのある探偵小説ジャンルの誕生と変容に注目し、近代日本を対象とするのみならず、西洋で誕生した探偵小説が日本経由でアジア圏に浸透していく様態を、戦前の日本植民地科学の進展や一般大衆への情報の還流状況と関連付けながら考察すべく、国内外の研究者と相互協力体制を構築し、これまでの一国主義・一言語主義的な文学研究の枠におさまらない研究領域を開拓することが目的である。具体的には、（1）アジア圏における多言語的な受容形態を踏まえた欧米探偵小説移入史の再構築と日本およびアジアにおける創作探偵小説形成期の再検討のための、資料体の整備と方法的な基盤の確立を進めると共に、（2）日本経由の西欧科学知識が植民地時代のアジア圏にどのように浸透し、大衆文化とどのよ

うに関わったかを海外現地調査により検証する。また、江戸期以前からの日本的表象が近代科学の影響やアジア圏の他文化との接触によってどのように変容したかをみる格好の例として、（3）忍者文化に注目し、忍者を題材とした小説やサブカルチャーを分析することで、西洋探偵小説がどのような影響を与えたのか、また、日本初の忍者イメージが西洋圏を中心にどのように受容され変容していったのか、トランスナショナルな角度から考察を進めてゆく。

3. 研究の方法

研究目的の（1）（2）については、台湾の国立中興大学や日本の北海道大学の研究者と協力体制をとり、2010年5月29日に北海道大学で開催された日本台湾学会第12回学術大会でパネル発表「推理小説と台湾の異文化接触」（座長＝朱恵足、報告＝高嘉励、陳国偉）にコメンテーターとして参加、2011年3月12日に台湾国立中興大学で「犯芸翻訳犯意：台日推理小説国際ワークショップ」を開催、2013年3月1日に国立中興大学での講演「ゼロ年代の想像力と日本ミステリの現在」に応じた際も含め、海外渡航機会を最大限に生かし研究課題の深化に努めた。2012年5月12日に韓国ソウル市の高麗大学で開催された東アジア文化交渉学会のパネルセッション「推理小説の政治文化」での発表「恐慌と震災—日本ミステリの場合」、2012年11月17日に台湾新北市の輔仁大学で開催された国際学術シンポジウム「ミステリーの迷宮」での特別講演「ミステリーとアジア的想像力」に招かれた際などにも、東アジア圏の研究者との国際情報交換に努めたほか、それ以外にも数回の現地調査を行った。

また、大衆文化のトランスナショナルな移動の様態を探るために、「忍者文化研究会」を組織、（3）として挙げた新しい課題に取り組むべく、戦後日本の忍者小説・忍者映画の読解分析に努め、忍者物というジャンルが実はアジア的な想像力を基層として持ち、多層的な文化的交差の可能性を秘めていることを明らかにしようとした。

4. 研究成果

（1）については例えば、シャーロック・ホームズ・シリーズの第1作である『緋色の研究』（A Study in Scarlet, 1887年）の明治期の4つの翻訳・翻案の比較検討を試みた。①無名氏「血染の壁」（明治32年）②原抱一庵「新陰陽博士」（明治33年）③森暲峰「モルモン奇譚」（「時事新報」明治34～35年）④小栗風葉「神通力」（39年）の4つであるが、これらはいずれも原作通りではない。このうち、原作同様に一人称形式となっているのは①②のみであり、③④は三人称形式であ

るのみならず、③は原作を時系列順に再編成し謎解き形式を破棄している。また①③は舞台を日本、登場人物を日本人に置き換えた翻案となっており、②においても冒頭の設定を原作の1878年から明治33年(1900)に改変している。当然ホームズとワトソンをモデルとする日本人キャラクターにも原作とは異なる点を多々見出すことができる。名探偵は合理的理性の権化としてではなく、スーパーナチュラルな神通力(千里眼)を持つ近代の陰陽師(超能力者)として表象されている。従来これらは探偵小説概念が当時いかに理解されなかったかというネガティブな事例としてのみ取り上げられてきたが、むしろ西欧の科学と東洋の伝統との文化接触において生じた葛藤として捉え直すことができる。

(2)については、日本・台湾・朝鮮・中国の対照探偵小説史年表を作成し、それを基に議論を展開する国際的な協力体制を築き、その成果をオープンにする準備がほぼ固まっている。例えば台湾でのシャーロック・ホームズ受容史を振り返ると、最初の翻案と考えられる餘生「探偵小説 智闘」では福爾摩斯(シャーロック・ホームズ)ははるばる船に乗って台湾島を訪れ、亞森羅蘋(アルセーヌ・ルパン)と対決する。『緋色の研究』翻案が北海道開拓や台湾領有化を取り込む形でなされたのに対し、台湾でのホームズは植民地化から人々を救うヒーローとなっている。加えてその漢文体は、菊池三溪、依田学海らの明治前期日本における西欧文献の漢文訳の表現から明らかに影響を受けたものであり、中国の公案小説から連なる別ミステリの系譜が息づく東アジアの漢文文化圏をトータルに視野に入れることで、一国文学史を超えた新たな探偵小説史・大衆文化史を展望する可能性が開けてきている。その一端は2013年12月1日の日本近代文学会国際研究集会で報告する予定である。

(3)についても、近年中に戦後日本の忍者文化について鳥瞰した、おそらく日本で最初の忍者文化の共同論文集を公刊する予定で、すでに準備に入っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 吉田司雄「ディスクールの変革、あるいは叙述トリックの彼方へ—筒井康隆の一九九〇年」、『国文学解釈と鑑賞』、査読無、2011年9月、P. 42~49
- ② 吉田司雄「明治期の『緋色の研究』、四人のシャーロック・ホームズ—探偵小説翻訳史稿(3)」、『工学院大学共通課程研究論叢』、査読無、第48-2号、2011年2

月、P. 69~62

- ③ 吉田司雄「代替の歴史と欲望の転移」、『物語研究』、査読有、第12号、2013年6月、P. 15~23

[学会発表] (計3件)

- ① 吉田司雄「ミステリーとアジア的想像力」
輔仁大学日本語学科国際学術シンポジウム「ミステリーの迷宮」、2012年11月17日、台湾・輔仁大学
- ② 吉田司雄「代替の歴史と欲望の転移」、物語研究会第41回大会シンポジウム「歴史は物語である」を越えて—「虚×実」が拓く〈物語〉の可能性—、2012年8月21日、千葉県富津市・さぐなみ館
- ③ 吉田司雄「恐慌と震災—日本ミステリの場合」、東アジア文化交渉学会第4回国際学術大会「災害と東亜細亜 Disasters in East Asia」、2012年5月12日、韓国・高麗大学校

[図書] (計1件)

- ① 一柳廣孝・吉田司雄(編)『ナイトメア叢書8 天空のミステリー』青弓社、2012年1月、全P. 176

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：
〔その他〕
特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 司雄 (YOSHIDA MORIO)
工学院大学 基礎・教養教育部門 教授
研究者番号：50296779

(3) 連携研究者

林 真理 (HAYASHI MAKOTO)
工学院大学 基礎・教養教育部門 教授
研究者番号：70293082